年収1500万円後押し

継承

浦部農園（藤岡市）は2004年から非農家出身者を中心に研修生を受け入れている。園主の浦部修（61）、真弓（61）夫妻が1～2年間で農作業や販売のノウハウをたたき込む。

思いは二つ。「一人でも多くの有機農家を育て、生きる力をくれた自然へのささやかな恩返しがしたい」。そして「血によらない農業の継承を」。

小屋用地が課題

凛と伸びた麦穂がすがすがしい5月上旬。吉岡町に手に入れた畑で、志塚淳（27）は一人無心に除草の鍬を振るっていた。浦部農園での1年半の研修を終了し、独立して2度目の収穫がもうすぐ。「今年は売りますよ」。声が弾む。

前橋市内の漬物製造会社に次男として生まれた志塚。千葉大大学院でポストハーベスト工学（農作物の収穫後処理）の研究に昼夜なく没頭していたところ、大学時代に発症した消化器系の難病、クローン病が悪化。ベーチェット病を克服した真弓をネットで知り、淡い期待を抱いて農園の門をたたいた。

農園の食事と規則正しい生活、農作業を続けるうちに症状は改善。現在は親戚らが都合してくれた農地1㌶でコメと大麦、大豆、野菜を有機栽培している。有機JAS（日本農林規格）認証を取得した穀物や野菜で漬物を作るのが目標だ。

これまで、こうして男女8人が農園を巣立ったが、独立は非農家出身がゆえの困難を伴った。最大の壁は農機を保管したり、農作業をする小屋の用地確保。「（使用が固定化する）建物用地を農家は貸したがらない」（藤岡市農林課）ため。農地が確保できても小屋がなければ機械を買えない。

また、農家に地縁も血縁もない2人の研修生は農地の確保にも苦しみ、農園の圃場を切り分けてもらって独立にこぎつけた。

「作業小屋用も含めて遊休農地を行政が借り上げ、就農者に貸し出すことはできないか」。浦部夫妻は国や県、市に求めているが実現していない。

40歳までに住宅

農園は研修生に有機の技術を伝授しながら、週40時間の作業で月5万円の「研修手当」を、時間外や土日に作業した場合はアルバイト待遇で1時間700～800円を支給。2DKのアパートも無料で貸している。費用の一部は県の助成を充てているものの、多くは持ち出しだ。

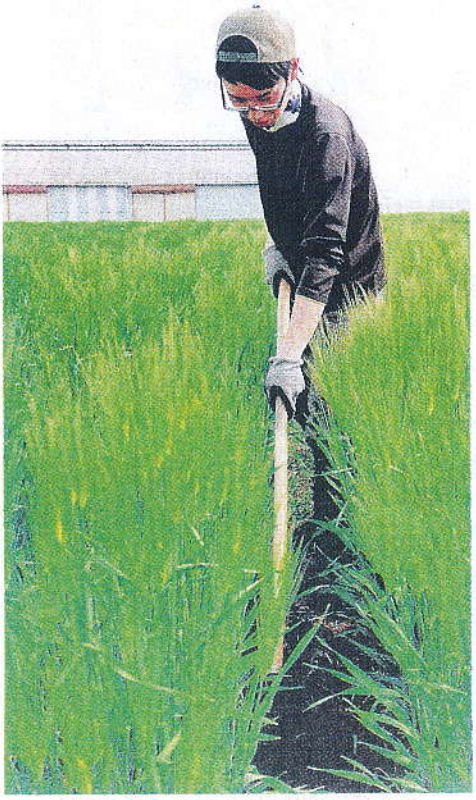
そうまでして研修生を受け入れるには、夫妻の有機への思いと、実績によって裏付けられた、ある自信がある。

「コメ、麦、大豆を基本に5㌶で有機栽培すれば、1500万円の年収が得られる。30代前半に独立して、40歳までに一戸建てが買える。農村で若い人が暮らせるんです」

4月から農園に入った高田結希（22）は太田市出身のサラリーマン家庭の次女。筑波大で農村社会学を学ぶうちに有機農業に興味を持った。

「過疎に悩む地域を何とかしたい」。来年10月の就農を目指し、小柄な体で鍬を振るっている。

（敬称略）



吉岡町に開いた農場で除草作業をする志塚。作付けを増やし、今年から本格的に販売を始める